



イフガオ州マユヤオ郡の棚田での実習の様子。棚田を荒らす外来種を駆除する方法や、ドジョウの養殖の可能性などを話し合った



イフガオ州バナウエ郡の棚田。同州内にある5つの棚田は2000年以上の耕作の歴史があるといわれ、95年にユネスコの世界遺産にも登録された



国際協力の担い手たち

### 次世代を担う 人材を育てる

山の斜面に積み重なる緑の幾何学模様。その先に広がる青い海。石川県能登半島にある棚田、白米千枚田はまさに絶景だ。

この棚田のように、山や森林などに人が手を加えながら自然と共生してきた地域を「里山」と呼ぶ。近代化が進む中でも地域ぐるみで里山を守り続けた能登の人々。2011年には、その伝統的な農業の保全・継承に向けて、国連食糧農業機関（FAO）から世界農業遺産（GIAHS）に認定された。しかし今、新たな課題に直面している。「若者が職を求めて都市部に移住し、過疎化が急速に進んでいます。集落の維持が難しい地域すらあります」。話すのは、国立大学法人金沢大学里山

## 国立大学法人 金沢大学

### SATOYAMAを誇りに

過疎化が進む能登半島の里山を守るため、人材育成を進めてきた国立大学法人金沢大学。その経験を生かしてタッグを組んだのは、同じ課題に直面するフィリピン北部のイフガオ州だ。



イフガオ州  
フィリピン

里海プロジェクトの研究代表、中村浩二特任教授。このままでは人口は減る一方、能登の里山を守る人もいなくなってしまう。この危機を打開しようと07年に金沢大学が立ち上げたのが、能登里山マイスター養成プログラムだ。



「イフガオ里山マイスター」  
養成プログラムの開講式

プログラムの目的は、里山を守る人材を育てること。1年間、隔週土曜日に森林の管理方法や環境配慮型農法、農産品の販売促進などについて学ぶ。「能登の美しい里山を守りたい」と、参加者は能登だけでなく、全国各地から集まった。これまでに農家をはじめ、会社員や行政官、デザイナー、主婦など84人が修了。能登の荒廃地にクヌギを植林して炭を生産したり、地元の食材を使ったお菓子販売を始めたりと、地域を盛り上げる新たな担い手が育ちつつある。

能登だけではない。05年にGIAHSに登録されたフィリピン北部、イフガオ州の里山でも、同様のことが起きていた。中村教授とフィリピン大学の研究者が旧知の仲だったこともあり、現地でイフガオの現状を話し合うワークショップを開いた時のこと。地元町長がこう訴えたのだ。「過疎化が進み、耕作放棄された棚田が増えたため、先人が守り続けてきた美しい景観が失われつつあります」。それは能登が直面してきた課題そのものだった。

能登里山マイスター養成プログラムで培った知見を、イフガオで生かせないだろうか。JICA草の根技術協力事業を通じて、金沢大学の挑戦が始まった。

**能登の経験を  
イフガオへ**

中村教授らが着手したのは、「イフ

ガオ里山マイスター」養成プログラムの設立。パートナーは、イフガオ州大学、フィリピン大学、自治体で構成する「イフガオGIAHS持続発展協議会」だ。

まずは、カリキュラムの作成から。講義と実習の組み立て、農業や養殖、政策などの専門家による講義の手配、卒業課題の進め方などをアドバイスした。「プログラムの講師を務める地元の教員などの意見を聞きながら、現地に即した体制づくりを目指しています」と中村教授は話す。

このように約2カ月間、協議会のメンバーと議論を重ねてカリキュラムが完成。今年2月には受講生の募集を開始し、約60人の応募者の中から第1期生20人を迎えた。月2回、1泊2日の日程で1年間学ぶプログラムだ。年代は20〜40代、さまざまな職種の人が集まった。地元の農家、ジュニア・ラナオさんは、「どうしたら村のみんなが豊かになれるのか学びたい」と意気込む。

このプログラムでは、とにかく「考える時間」を受講生に与える。「棚田を荒らす外来種のミミズをどう駆除するか」「観光客を呼び込むにはどうすればいいか」「棚田でドジョウの養殖はできるか」…。受講生自身が挑戦したい取り組みを決めて、どうすれば実現できるのか、全員で話し合うようにしている。こういった学びを繰り返すことで、自らの課題を見つけ、解決す



農村の活性化について受講生と意見交換する中村教授(左奥)。同じ志を持つ受講生の間でネットワークができれば大きな力になる

る力が身に付く。

「受講生の熱意には感心します。伝統的な農業を守りながら地域を発展させたいと、家から8時間かけて通っている人もいますよ」。中村教授は、彼らに成長の可能性を感じているよう。受講生の一人、環境保全のボランティアに取り組んできたインフマン・レイノス・ジョシヨスさんは、「このプログラムでの学びを棚田の保全に生かし、周りの人たちにも伝えていきたい」と目を輝かせる。

9月にはプログラムの一環として能登で研修を行う予定。イフガオと能登の若者たちが交流し、里山と農業の未来を語り合うことで、新たな発見が生まれるはず。世界農業遺産を共に守るため、国境を超えた連携が生まれている。

1,004枚の田が積み重なる白米千枚田

※2012年からは「能登里山里海マイスター育成プログラム」に変更。